和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori　NPO法人百年の森づくりの会

2023 10.1 46号

巻頭言……１　／　総会・記念講演会……２－６　／　会員だより……７・８
福島県田村市の百年の森……９・10　／　令和５年度　第16回通常総会開催……10
長瀞宝登山下草刈り活動報告……11

「百年の森づくりの会」への思い

理事長　高岡正彦

今年の６月の総会にて、私が理事長に就任することになりましたので、ここにご挨拶いたします。

初代理事長の内藤勝久氏は、並外れた行動力、人望もあり、数々の事業を始められました。本会発足当時から、藪だらけの和名倉山に「ブナを植えよう」、崩壊しかけている「仁田小屋を再建しよう」、大陽寺・中津川山吹沢・宝登山に「みんなで植林しよう」等々企画し、実現させてきました。とにかく発想も豊かで、会の活動は大変充実した日々でした。

内藤氏の不慮の急逝後、２代目坂本和穂氏は、東日本大震災復興事業として福島県田村市の伐採地にブナ・ミズナラ・コナラなど１０７０本の植樹に、リーダシップを発揮されました。

３代目小林公彦氏は、会発足時から副理事長として「ＮＰＯ法人化」、「仁田小屋再建に伴う会計」等々、手腕を発揮されました、特に長瀞宝登山の植林活動には毎年５回の下草刈りを仕切られ、今では見違えるほどの山容です。

今回、４代目として私が就任することとなったのですが、諸先輩たちの偉業を思うと、その重責につぶれそうですが、発足当初からの「和名倉山愛」で、微力ながら、一生懸命努めていきたいと思います。皆様方のさらなるご支援ご協力をいただきますようお願いいたします。

思えば、内藤氏を和名倉山に案内したのは私で、１９９７年でした。その時の和名倉山は１９６４年の山火事の焼け跡にカラマツを植えたそうですが、荒廃したままの箇所がありました。「そこに元来の植生があるブナを植えよう。」とこの会が始まりました。山火事の時分から国内の林業は衰退し、山での仕事がなくなり、年を重ね山は藪だらけになりました。和名倉山はルートを見失って遭難する事故の多い山となりました。私も沢登りの後下山ルートとして、和名倉山の尾根道を使ったことがありますが、２ｍを超えるスズタケの藪で大変苦労しました。苦労したものの、和名倉山には同時に、人を安易には寄せ付けない魅力を感じました。

本会の活動で、植林だけでなく、「秩父往還の歴史」「三峯神社の歴史」「秩父大滝の地質」平賀源内が絡む「秩父鉱山（ニッチツ）の歴史」等々、秩父地域を学びました。文化の歴史の多さにとても魅力を感じます。それらには特別な人の偉業や、特別な出来事だけでなく、多くの人間の、長い年月の歴史を感じています。それらを生かすような百年の森づくりの活動がしたいと考えています。

これまで、私は本会で、和名倉山での植林活動を主に携わらせていただきました。和名倉山の仁田小屋尾根作業道を整備し、「一歩の森」「セカンドフォレスト」と植林を続け、最近はシカの食害を防御のために、現存する広葉樹にネットを張る活動を行っています。その間、和名倉山のスズタケは枯れ果て、最近は若い芽が見られるようになりました。自然の再生の力を感じます。

今後の活動としては、森林を育む、山・自然の保全に携わっていける「仲間を増やす」ことが大切だと考えています。日本には、奥多摩、丹沢を始め、日本アルプスなど自然を保全しつつ、観光と両立して、豊かな森が作られています。同じようにというのではなく、一定程度の管理された保全された自然づくりに励み、たくさんの仲間と保全活動を続けたいと思っています。そのためには、「楽しみ」を込めた活動が必要だと考えています。若い人にも、また年間を通じての活動を促進したいと考えています。

「山中の自然観察」「山中での営み」「山の動物との共存」…。

皆様におかれましても何か名案がありましたら教えていただきたいと思っています。人間も自然のうち、「自然の中での人間の成長」が私の最大のミッションと考えています。よろしくお願いいたします。

総会・記念講演会（令和五年六月四日）

日本の公園の父 本多静六とWell-being

講師　本多静六博士を顕彰する会　会長　渋谷 克美

皆さんこんにちは。

昨年11月13日に明治神宮の視察でご一緒させていただき、それがご縁で今回またお話する機会をいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

今回は、日本の公園の父本多静六とWell-being（ウェルビーイング）というテーマでお話させていただきます。

Well-beingというのは、精神的、身体的、社会的な健康を意味する概念で、瞬間的な幸せ感Happiness（ハピネス）とは異なり、「継続的な幸せ感」を意味するものといわれています。心身のみならず、社会とのつながりがある中での健康ということです。

Well-beingという概念は本多静六（以下本多とする）が目指した生き方や、公園設計のポリシーに繋がっていると改めて実感しましたので、今回はWell-beingをサブテーマにお話させていただきたいと思います。

本多は明治・大正・昭和と激動の時代を生きた人です。文明開化、富国強兵、軍国主義、産業革命、身分制社会、格差社会、民主主義、資本主義、国際化等がものすごい勢いで進んだ時代です。

令和の今の時代にも通ずるような気がします。例えば、格差社会ですが、７人に１人の子供が相対的貧困にある。技術革新ではChatGPTなど生成ＡＩが話題になっていますが、今後人から仕事が奪われるということも。グローバル化では、異常なほどアルファベットの略語、カタカナ語が頻繁に使われている。このような時代だからこそ、本多の考え方、生き方を再評価し、見直してもよいのではと思っています。

【本題静六ってどんな人、何をした人】

はじめに本多の主な業績をご紹介しますと次のようになります。

- 日比谷公園、明治神宮の森の設計者
- 日本最初の林学博士、造林学・造園学の基礎を築く
- 日本で最初の「鉄道防雪林」、「大学演習林」を創設
- 神戸の六甲山の植林や東京水源林の造林に尽力
- 国立公園の創設に尽力
- 日本各地の公園・観光地・温泉地の改良策を提言
- 埼玉学生誘掖会（学生寮）、本多静六奨学金の創設

埼玉県の学生が東京に通うのは大変だったので、埼玉県の学生のために学生寮を造りました。

- 生涯に３７６冊の著書を残す。この内昨年は復刻版として『合本版私の財産告白・私の生活流儀・人生計画の立て方　本多静六』が出版されました。

【生い立ち】

本多は慶応２年武蔵国埼玉郡河原井村（現久喜市）の折原家の第６子として生まれます。代々名主の家で裕福な家でしたが、静六が９歳の時に父が亡くなり、多額の借金が遺されます。そのため苦学をしながら、明治17年東京山林学校に入学します。植物に興味があった訳ではなく、東京山林学校は新しくできた学費も安い学校だったため、恩師の勧めもあって入学したようです。入学者50人中50番目の成績だった本多は、幾何・代数で落第点をとったこともあったようですが、その後は猛勉強して最後は首席で大学を卒業します。

明治22年、22歳の時に婿養子の話がきます。相手は元一橋家の家臣本多家の一人娘銓子です。勉学に熱中していた静六は気が進まず断る方便として、「ドイツに留学させてくれるならば」という条件を出したところ、相手側は静六をすっかり気に入り、条件を受け入れ婚姻が成立、静六は婿養子として本多姓を名乗ることになります。そして翌年ドイツに留学、明治25年ミュンヘン大学で博士号（ドクトル）を取得して帰国、母校東京農科大学（現在の東京大学農学部）の助教授に就任します。この頃から「四分の一天引き貯金」と「一日一頁の執筆活動」を始めます。

「四分の一天引き貯金」というのは、苦学の経験から、学者として大成するためにはお金が大切だとの留学時代の恩師の教えに従い、給与の四分の一を貯金して元手をつくり、貯めたお金を積極的に投資していくというもので、最終的には今のお金にして数百億円の資産を残したと言われています。そして後年その資産のほとんどを寄付しています。

明治32年に、学位論文「日本森林植物帯論」で日本最初の林学博士となり、翌年に教授に就任し、以後後身の指導にあたります。

昭和５年、63歳の時に秩父に所有する山林を奨学金の創設等を条件に埼玉県に寄附します。県では昭和28年に奨学金条例（無利子）を制定して、翌年から貸し付けを開始。これまでに２千人を超える方が利用しているとのことです。

昭和18年、76歳の時に静岡県伊東市にある温泉付き別荘地「歓光荘」に転居し、昭和27年1月29日、85歳で亡くなるまで同地で晩年を過ごしました。

【日本最初の洋式公園・日比谷公園の設計】

日比谷練兵場跡地での公園設計を任されていた建築家の辰野金吾氏に、本多が西欧の公園についてアドバイスしたところ、「そんなに公園の事を知っているなら君がやりたまえ」ということで、偶然にも設計を引き受けることになりました。

ドイツ留学の経験を基に、ドイツの公園をモチーフにした全体の構成、主要園路、運動場、池と築山、芝生地、音楽堂などが市議会に評価され、明治36年日本初の洋式公園、日比谷公園が誕生しました。これがきっかけとなり全国各地の自治体等から公園設計の依頼が舞い込むようになり、数百にも及ぶ公園設計に携わることになります。「日本の公園の父」と言われる所以です。

日比谷公園の設計では市議会から、「何故公園に門扉をつけないのか。夜中に草花が盗まれる」「公園に池を作ると身投げの名所になる」「予算がかかりすぎる」など様々な意見が出されました。

これに対して本多は、「公園は公徳心を養う教育の場である。公園の花が盗まれるようでは日本は亡国となる。盗む気が起きないくらいに沢山の花を植え、花があるのが当たり前の風景にするのだ」、身投げ対策には「池の周囲に一間ほどの浅瀬をつくり、岸から一気に飛び込めないようにする」、予算は当初の27万円を18万円に縮小し、「樹木はごく小さな苗木で、十年後に公園らしい風景になれば良い」ということで、本多の管理下にあった農科大学の不用になった苗木を安く払い下げて植えたりしました。

日比谷公園には、本多のエピソードとして有名な「首かけイチョウ」があります。公園内に松本楼というレストランがありますが、その傍に大きなイチョウがあります。当時日比谷交差点の道路拡張に伴い樹齢400年の大銀杏が切り倒されることを知った本多が、自分の首を賭けてでも移植を成功させると言ったことから、「首かけイチョウ」の名がつきました。当時のお金で460円、今に換算すると約7百万円の費用をかけて約500mの距離を約25日間かけて移植しました。

【明治神宮の森づくり】

明治天皇が崩御され、大正4年に明治神宮造営局が発足しますが、その中心的なスタッフとして本多は活躍しました。神社の候補地は飯能の朝日山、箱根、筑波山などいろいろあったようですが、皇室との縁ということで最終的に代々木に決まりました。神社の敷地面積は約70ha、その大部分は田畑や草原、荒れ地等で森林は5分の1程度しかなかったそうです。

本多は当初、大阪市堺にある仁徳天皇陵の森をイメージしていたようですが、そこは極相状態にあり、常緑広葉樹だけの森では暗すぎるという意見も出たことから、明るさと水流などを取り入れ、風景に変化を持たせて造成することとしました。森づくりの手法は、百年先を見据えた「天然更新」の森づくりです。

「天然更新」とは樹木が種子を落とし、実生から育った木が、老木が枯死した時に後継木になることを繰り返すことです。そして中心木となる樹木は、煙害への抵抗力が強く、日陰に耐え、かつ神社として荘厳さがある木を選びました。創建当初はマツ、スギ、ヒノキ、サワラなどが中心木のように見えますが、最終的にはカシやクスノキ、シイ等の常緑広葉樹が中心木となる森を造り、人の手を加えず森が永続していく、つまり自然林となるという考え方です。

この計画に対し、時の大隈総理から「神宮の森は雑木林ではなく伊勢神宮や日光東照宮の杉並木のような荘厳な森にするよう」との横やりが入りました。その際本多たちは科学的根拠に基づいた資料を作り、代々木の土地にはスギ、ヒノキは適さないことを説明して納得させたそうです。

明治神宮の森づくりは、日本造園学の発展の礎になったことでも知られています。特に困難を極めたのは旧白金火薬跡地（現自然教育園）からの移植作業でした。本多の愛弟子の上原敬二が現場責任者となって、約10km離れた場所から日数80日余り、人夫約8千人、牛約20頭、馬約400頭を用い成し遂げました。

【軽井沢遊園地構想】

明治44年10月30日、本多は弟子の本郷高徳と共に軽井沢の現地調査を行い、同じ日に軽井沢遊園地（公園）の設計方針を発表しました。

軽井沢が避暑地として発展したのは、明治19年にカナダ人宣教師がひと夏滞在したのがきっかけと言われています。当時の軽井沢には避暑地らしい施設は何もなく、広く見渡せるところでした。現在の矢ケ崎公園、植物園、音楽ホールなどは昭和になってから出来ていますが、そこにはこの時の本多の構想が色濃く入っているように思われます。矢ケ崎公園にある音楽ホールはソニーの会長が町に寄付したものですが、本多の構想は町全体を公園化しようとするものですから、行政だけでは到底できません。民間からの投資も必要になる訳です。

明治26年に横川・軽井沢間の鉄道が開業し、信越線が全線開通します。明治30年頃には貸別荘やホテルが営業を開始し賑わいましたが、明治43年8月の大水害により甚大な被害を受けます。そこで長野県では県全域の復興を図るため、今後も県内外から大勢の観光客が見込まれる軽

井沢の復興を優先課題と捉え、軽井沢に公園を整備する方針を決定し、本多に避暑地として相応しい公園の設計を依頼しました。

本多は、「軽井沢は我が国にとっても比類なき高原的風景に富み、夏季の避暑地として素晴らしい特性を持っている。しかも何ら公園としての設備がないにもかかわらず、年々千人を超える外国人が訪れる。日本人は5千4百人が避暑に訪れている。年々増加することを考えるに、しっかり整備することによりその発展は計り知れない」と語っています。

また、「元来日本の自然風景の多くは田舎娘のような天然の美であるのですが、何ら行儀作法を学んでいないのと同じで、世界からのお客をもてなすのには少々難があります。特に軽井沢はこの感が否めません。長野県がここに目をつけ私たちに設計を検討依頼したのは国や県のためにも大いに喜ばしいことです。そこで今日踏査した結果をここに申し上げるのですが、一回の調査で計画を立てるのは本意ではありませんが、まずは軽井沢公園化構想の大まかな方針を申し上げます」として26項目の方針を発表しています。

主な項目は次の通りです。

①大中小の回遊道路・散策路を整備する。

②水辺の景観として雲場池（くもばいけ）を整備する。

③人工的に湖水をつくり娯楽施設（ボート・スケート遊び、音楽鑑賞施設等）を整備する。

④離山（はなれやま）に植樹をして四季の彩を豊かにする。

⑤高原的原野の美を発揮させる（古草は毎年刈る、草花の栽培等）。

⑥散歩が楽しめるよう休憩場所やベンチ等を整備する。

⑦観覧席付き芝生広場を整備する。

⑧道路の両側に新緑・紅葉に適した樹木を植える。

⑨スケート場を整備する。

⑩手を洗う水場と飲料水とは別々にして、休憩場所とは少し離れた場所に整備する。

⑪子供用遊具を整備する。

⑫離山や碓氷峠の見晴台に展望台を設けて売店を置く。

⑬ミルクホールでパン、コーヒー、紅茶等（外国人が好む洋食）を販売する。

⑭植物園を整備する。

⑮公衆トイレは直接人目に触れないように整備する。

当時、長野県では財政難ということで、これらの計画は中々実現しなかったのですが、大正時代には貿易商や資産家が中心となって、また昭和の時代になってからは大手の民間資本等が中心となり、これらの構想を実現させるかのように徐々に整備が進むことになります。

【大宮公園の改良設計】

大宮公園にはボート池、児童遊園地、小動物園、白鳥池、売店、自由広場など整備されていて日々多くの人々が訪れています。明治18年に開園して今年で138年になりますが、当時は氷川公園と呼んでいました。本多が設計に携わったのは現在の第一公園に当たる箇所で広さは約38haあります。その後第二公園が昭和5年に、第三公園が平成13年に完成しますが、3つ合わせると約68haあります。これは明治神宮の面積約70haに匹敵する広さです。

本多が設計した現在の第一公園には、桜林や松林が特徴の自由広場のほか、ボート池や児童遊園地、小動物園などがあります。その他野球場、サッカー場、自転車競技場、水泳場、体育館など多くのスポーツ施設もそろっています。本多は日本各地の公園設計に携っていますが、大宮公園は本多がそれらの計画に入れ込んだほぼ全ての施設が整っている理想的な公園の集大成ともいえるものです。

1. 氷川公園の変遷

日本の公園の歴史をみますと、明治6年に太政官布告第16号により我が国に初めて公園が誕生します。埼玉県では翌年浦和の調神社が埼玉県初の公園に指定されます。氷川公園は明治16年頃から地元有志らにより設置運動が始まり、翌17年に大宮宿総代ら43名による「公園設置及び維持方二付奉願候」の文書が埼玉県令宛に出されています。

その2年後の明治18年9月22日に氷川公園は開園しますが、財政難が続き運営費を確保するため、公園地の一番良い場所を旅館、料亭、茶店等に貸し出すようになります。

明治34年、埼玉県では来園者誘致に力を入れ「大宮氷川公園案内」いわゆるパンフレットを作成して、県下や東京の学校等に配布し、遠足や林間学校の利用者の増加を図ります。

しかし、利用者の増加に伴い、公園への失望や不満の声が高まってきます。財政難のため設備の維持管理が思うようにできない。一番良い場所が旅館やお店になっていて、何とかしなければいけないという課題が表面化してきました。

明治44年には県会からも「氷川公園整備及び拡張に関する件」の意見書が知事宛に出されますが、財政難のため整備は中止となります。前年の大水害の被害により埼玉県も大きな被害があり、整備が難しかったようです。災害復興が優先だったのでしょう。

こうした経緯を経て、大正9年県の臨時調査会において氷川公園の改修を決定し、当時公園設計の第一人者であった本多に設計を依頼することになります。

2. 本多静六の氷川公園改良計画

本多は数回にわたる綿密な実地調査を行ったうえ、「埼玉県氷川公園改良計画」を作成します。この計画は時代の変化に合わせて若干の修正が加えられていきますが、現在の県営大宮公園の基本構想になっています。

まず、本多は現状の公園の問題点を次のように指摘します。①神社と公園の敷地が混同していること。②公園の主要な場所を料亭などが独占していること。③運動場の場所がその目的に合わず、他に大いに利用されるべきこととしています。

そして、改良の基本方針として、①公園の面積を現在の約4倍に拡張する。②経費の大部分は県が負担し、一部は大宮町など関係者からの寄付を仰ぐ。③公園全体を3区域に分け、3期に分けて整備する、としました。ただ、この計画を実現するには数十年はかかるだろうとしています。

第1期は氷川神社境内・旧公園区域の整備です。

①参道と公園の区域を明確に分ける。②料亭等を向山（現在博物館がある高台方面）に移転させ、跡地は児童の運動遊戯場（小運動場）とする。③今ある運動場を埋立地（第2区域）に移転させ、跡地は公園の中心的な景観となるよう芝生と植え込みを配慮する。④運動場の一部を桜林、松林とする。

第2期は向山・新埋立区域です。

①埋立地の上部に池を造り舟遊びや釣りができるようにする。池には大小の2島を造り四阿を設置する。②池の周囲には散策路を整備し、上方には雑木林を造成する。③料亭等の建物は野趣のある別荘風とし、景観の一つとなるようにする。④埋立地の下部には大運動場を整備し、自然の傾斜を活かした観覧席を設ける。⑤向山とその北部には桃・竹・梅・桜等を適宜植栽し、眺望を妨げない場所に料亭等を集める。⑥自然式の野外劇場を設け、演劇・演奏会・講話会等、一般の人々の利用に供する。この野外劇場の考え方は日比谷公園を設計した時の小音楽堂にも通じるものがあります。

第3期は南部小丘陵区です。①水田に花菖蒲・蓮を栽培し、畑は果樹園とする。②回遊路、散歩道沿いに家畜園・動物舎を設け、茶店を置いて新鮮な果物や牛乳類を販売・飲食させる。③氷川神社の参道近くに四阿を建て公衆に供す。以上が改良計画の大まかな内容です。

3. 本多が公園に寄せる思いと社会的背景

ここで私の私見ですが、本多が公園に寄せる思いというものを纏めてみました。

①産業の発展に伴う生活環境（特に労働環境）の変化により、人々は不健康な状態にあることから、今こそ身心の健康を大切に保つべきである。つまり本多の言う「健康第一主義」です。心身の健康を保つためにも公園は必要だというのです。

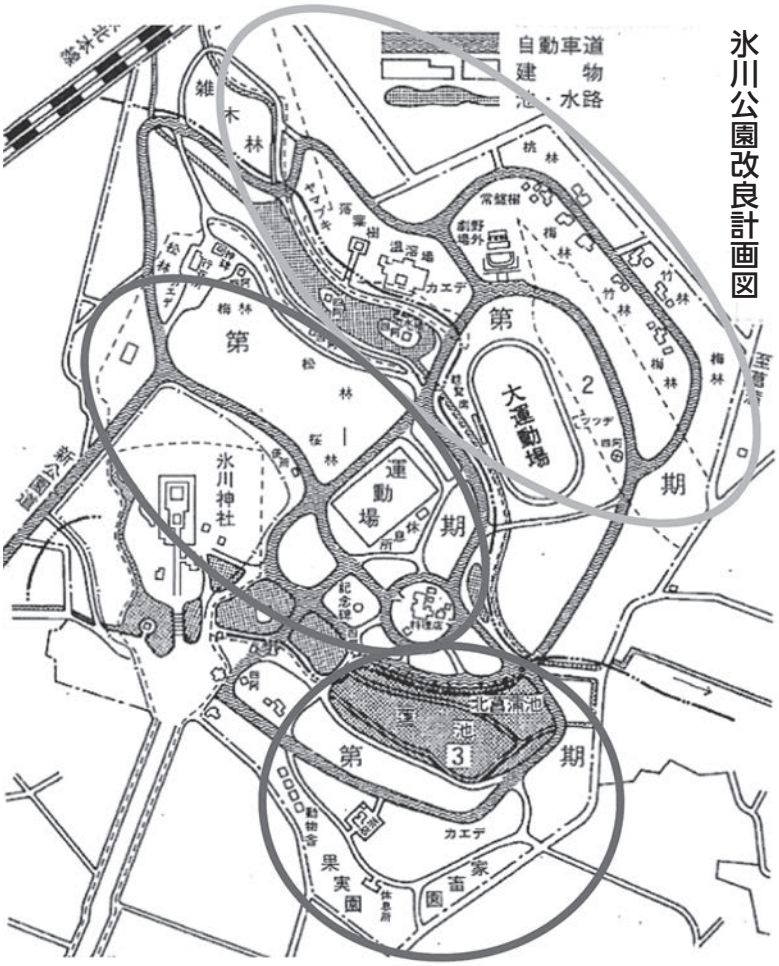
②グローバル化に伴う国力増強の必要性や軍国主義を背景に、先進諸外国に倣ったインフラの整備が必要であり、公園もその一つだと言っています。

③戦時下における国民の責務として無駄を省いた合理的生活、「独立自供」を促す。本多の言う「独立自供」とは、生活全般において自分のことは家族や他人に頼ることなく自分でやるということです。合理的生活とは例えば、家族が多くの時間いる部屋は家の最も日当たりの良い場所に配置する。住宅は小さくとも便利に使えるようにする。庭にはお金をかけず、実のなる木を植えるか菜園にして、公園を自分の家の庭代わりにするというものです。

④公園を整備することは、今申し上げた①から③に役立つばかりでなく、地方経済を活性化させ、地方文化の振興にも寄与する。本多の大宮公園の設計は東京からの観光客の誘致を意識して作られています。お金を落とさせ、地域の経済を豊かにすることも考慮していました。新たな大宮の特産品を生み出し、お土産品として生産・販売することを強く提言しています。

⑤時代的背景として、交通機関の発達、余暇活動の増大、自然への回帰、

氷川公園改良計画図



本多静六の大宮公園改良計画図

スポーツ・文化の振興、雇用の創出なども意識していました。

4.その後の大宮公園整備の推移

・大正10年以降、県は公園用地を拡張し、昭和初期までに第1期工事の整備を終える。

・大正14年、埼玉県体育協会は氷川公園に「総合運動場」を整備することを建議する。

・昭和5年以降、第2期埋立工事に着手するも技術的、財政的に難航し、昭和13年まで延長する。

・陸上競技場（大運動場）に先立ち、昭和になって盛んになってきた野球場を整備し、昭和9年に竣工させる。完成式典後にアメリカ大リーグ選抜軍と全日本軍との日米親善野球が開催される。

・昭和8年に若干の遊具を備えた児童遊園地が、昭和9年にテニスコートや児童プール、ボート池が完成する。ボート池は東京には無かったようです。

・昭和11年に第11回ベルリンオリンピックが開催され、次回開催が東京に決定されたことを受け、双輪場を併設した陸上競技場の工事が本格再開される。県は大宮に選手村と練習場を招致し、オリンピックの正式種目であった自転車競技を誘致するため双輪場を整備した。

・昭和13年7月、国際状況の悪化によりオリンピック返上を決定。

・昭和14年に双輪場が、同15年7月に陸上競技場が完成する。

・昭和25年にスポーツランド（飛行塔）が、昭和28年に小動物園が、昭和30年に弓道場がそれぞれ完成する。

・昭和35年、日本初のサッカー場専用球技場「県営サッカー場」完成。

・平成元年に「日本の都市公園100選」に、平成2年「さくら名所100選」に認定。令和4年7月「野球の聖地・名所150選」に認定。

本多が設計方針を示した中で、当時財政難のためできなかった整備が、その後時代に合わせ手が加えられて、数々の整備が進んだのが現在の大宮公園です。本多が各地の公園設計の中でイメージしていた構想が全て集大成されたのが大宮公園ともいえます。

【本多流処世術とWell-being】

Well-being とは、始めにもお話したとおり、精神的、身体的、社会的な健康を意味する概念で、「持続的な幸せ感」を意味します。

Well-beingという言葉は昭和21年の世界保健機関（WHO）憲章の前文にあります。

本多がこの言葉を知っていたかは定かではありませんが、この考え方を自ら実践していたことは、生き方、考え方から伝わってきます。本多の暮し方、考え方は以下の通りです。

・世の中（人生）は思うようにいかないので、ありのままを受け入れ、自らの努力で対処していくほかない。

・一仕事終わったら結果がどうあろうと、まずそれをキレイに忘れること。

・人生の幸福感とは、地位や収入の高下ではなく、現在より生活の動きの方向が上向きか、下向きかによって決定されるものだ。

・貧乏経験のある者でなければ、本当の人生の値打ちは分からないし、生活の向上をめざそうとする努力とそれに伴う幸福感は生じない。なるべく若い時に一度は苦労し、貧乏を経験しておくことはその人の人生において大事なことである。

・老化防止のため一日に2時間以上は歩く。

・時間と物は粗末にしない。

・身の周りのガラクタは処分する。

・綺麗な空気と充分な日光を浴び、腹を空かせて食事を美味しく食べるなどです。

本多は少年・学生時代に貧乏生活を経験したことから、貧乏の大変さを強く意識し、幸福とは何か、また幸福の実現、人生の成功を目指して懸命に努力を続けます。

人生における成功とは何か、幸福とは何か。本多はその一つの結論として精神的、身体的な健康と、社会的、経済的な成功の大切さに思い行きつきます。そしてその判断基準は、地位や収入の上下で決まるのではなく、常に右肩上がりであること、その為には自分が努力をしていくことが必要かつ大切であり、結果として幸福感に繋がっていくというのです。

つまり、今日のサブテーマであるWell-beingの実現、向上のためにも、心身の健康を養い、人との交流の場となり、更に経済・文化を発展させるための施設として公園は必要だという考え方につながっていきます。

最後になりますが、本多は人生成功の秘訣として「凡人はいかなる場合も本業第一たるべきこと。一つの事に全力で集中して押しすすむことこそが凡人が成功する唯一の道であり、職業上の成功こそが人生最大の幸福をもたらすものである。『**人生即努力、努力即幸福**』、これが私の体験社会学上の最終結論である」と述べています。

Well-beingを実現、向上させるためには自分なりの「努力」が必要だという考え方、これがまさに本多静六流のWell-beingだと思います。

以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

（文責　事務局）

会員便り

「神坐す山」を次世代に繋いでいくために

会 員　桑原 登

長瀞宝登山にて桑原さん

『神坐(います)す山の物語』という小説を読み終えた丁度その日、本会報への原稿執筆を求められました。入会してまだ５年足らずの新米ながら、「神坐す山」の一つである宝登山で時に下草刈りに参加している私は、これも何かの縁だろうという思いで執筆を引き受けたのです。

ちなみに、上記の小説は、奥多摩の武蔵御嶽神社に伝わる霊魂譚を浅田次郎氏が綴ったものであり、残念ながら育林に関する話は何もありません。ですが、神坐す山の伝統・風習が子々孫々に伝えられる様子の一端は描かれています。かつて一時期、神社に奉仕していた私は、自然崇拝と祖先崇拝という素朴な信仰の下で営々と積み上げてきた我が国の古き良き伝統を後継世代に繋げていきたいという思いが少しはあります。そうした思いを踏まえ、宝登山で感じたところを記してみます。

山仕事の喜びと残念な思い

宝登山下草刈りに参加して感じるのは、一心不乱と言うと大袈裟ですが、ただ黙々と草刈り鎌を振っていると無心になれることです。山の傾斜地で足場と鎌の先に注意を振り向けつつ鎌を振るので、集中力が高まるのでしょう。流れる汗の量は半端ないですが、汗と一緒に日ごろの雑念が取り払われるので気分がすっきりします。それに、作業を終えて大空の下で摂る昼飯の美味さは格別です。

長瀞宝登山下草刈り参加者　左から3番目が桑原さん

他方、残念な思いもあります。神社界には「神職は木を切らない」という鉄則があります。現に神社本庁では、境内の立木１本を伐採するにも許可を受けるよう傘下の神社に求めています。あるがままの自然を守るのが神社・神職の勤めであるという訳です。このため、草木を刈るのには抵抗感があります。もっとも、植林を守るのが優先される以上、みだりに伐採してはいませんよと、自らに言い聞かせています。

もっと残念なことは、若い人の参加者がほとんどないことです。いつも70歳、80歳代の方が作業の中心を占めていて、皆さんの頑張りは凄いなと思う一方、先々を見据えたとき、若手の参加者を増やしていかないと、「100年の森づくり会」の先行きはどうなのかと心配になります。

会員便り

「お山」の大切さの周知を!

少子高齢社会にある我が国は、様々な分野で人手不足が深刻化していると言われます。取り分け林業は、高度成長期以降、外材の輸入が盛んになり、国内産木材は見向きもされず、山林の荒廃につながったというのは広く知られているところです。林業従事者数は、昭和30年の約62万人から、平成27年には約5万人弱にまで減少しているとの統計もあります。それだけに、本会の人手不足も致し方ないのかも知れません。

しかし、昨今は異常気象が世界各地で頻発する中、自然環境保全の重要性が強調され、森林・山林が持つ重要性に目が向けられています。我が国では平成15年に環境教育促進法が成立し、学校や地域、職場で環境保全の活動を進めるとの方針が示され、学校教育では環境について各教科で学ぶよう指導されているとのことです。

これらの取組が学校や職場等でどのように行われているのか知りませんが、私としては、これらの取組を行う際には、日本人が「自然への畏敬の念」を持って「お山」に接してきたことを大いに強調してほしいと願っています。ちなみに、冒頭で紹介した『神坐す山の物語』では、主人公の伯父である神官が死去して社殿と離れた奥津城に納骨をした際の情景について、「墓所には…あちこちに八百万の神々が佇み、うずくまりしているように思えた」、「古代の神々ばかりでなく、死んだ祖父や曾祖父の気配も強く感じた」などと叙述して、人は神上がりして後は山中に棲むのだとする伝統的観念を今に伝えています。また、最近読んだ『老害の人』(講談社刊)でも、作者の内館牧子さんが青森県出身の高齢者夫妻を登場させる中で、「死ぬってことは、神さんのいるお山に引っ越すことなんだ」と言わせ、妻が亡くなると、妻の引っ越し先は郷里の岩木山とみて、老いた身で青森に出かける夫の動きを盛り込んでいます。「神坐す山」とは上記のようなイメージで語られてきたと言えます。先祖の御魂がお山にあると思うとき、お山が身近に感じられ、自然への感謝の念も自ずと高まることでしょう。

科学万能の時代に「迷信かよ」、と訝る方もいるでしょう。でも、科学万能の世の中を作り出した西洋人は、キリスト教の教義を踏まえ、自然を征服の対象と見なしてきました。その延長上に今の地球環境の異常があるとも言えます。これに対し、我々日本人は、太古の昔から「自然への畏敬の念」を持ち、戦後すぐまではこうした観念を保持してきました。しかし、今どきの子供はもちろん、親世代もこのような日本人の信仰なり伝統を忘れ去っているのではないかと推察されるので、自然崇拝(アニミズム)の観念と心掛けは、今では世界に誇れるものであると環境保全教育の中で忘れずに伝えてほしいと思うのです。その学びが動機づけとなり、お山を守る活動の活発化へと繋がることを願っています。

東日本大震災復興支援

福島県田村市の百年の森　視察（6回目）

副理事長　守谷　裕之

４月６日福島県田村市の百年の森を視察。今回は植林したブナ１本１本にナンバーリングした木札を付けました。更に変形したブナか多いので測定ポイントの高さと周囲胴を記録しました。15㍍を超えるとなかなか正確に測定できません。17年生のブナ（270本）を植えた植林地は中央に車１台が走れる道が横断しています。その下側は鬱蒼としてなかなか入れません。そこで今年は伐採してちょっとした道を作りました。

林道の上側は大体50本、その内27本に木札を付け記録を取りました。林道の下側は道をつくりながら行ったのでその間に確認出来たのは15本。ざっと100本は優にあるでしょう。2014年に植えた記録では270本ですからもっとなければおかしい。これからも木札を付けて記録を残していきます。

田村の森づくり（2023/4/10）

No.	測定の高さ (cm)	周囲長 (cm)	No.	測定の高さ (cm)	周囲長 (cm)
1	50	32	31		
2	50	21	32		
3	50	22	33		
4	50	21	34		
5	30	21	35		
6	50	20	36		
7	50	23	37		
8	50	22	38		
9	50	20	39		
10	20	27	40		
11	50	27	41		
12	50	18	42		
13	50	28	43		
14	50	23	44		
15	50	23	45		
16	50	31	46		
17	50	25	47		
18	15	30	48		
19	30	27	49		
20	50	32	50		
21	50	30	51		
22	50	18	52		
23	50	27	53		
24	50	30	54		
25	50	30	55		
26	50	17	56		
27	50	25	57		
28			58		
29	平均周囲長	24.8	59		
30			60		

No.20のブナは50㌢の高さで胴囲は32㌢

道づくりで15本確認出来ました。

東日本大震災復興支援

15㍍以上になったブナ

林道奥の右側斜面にも植林しましたがそこまで
手が回らずどうなっているのか調べてみたい。

令和５年度　第16回通常総会開催

ＮＰＯ法人百年の森づくりの会の令和５年度第16回通常総会が、６月４日（日）埼玉会館において開催されました。

当日は、令和４年度事業報告・収支決算案、令和５年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。また、任期満了に伴い役員の選任案について、下記役員を再任することで提案し、満場一致で原案通り承認されました。

役員は、以下の通りです。（敬称略）

理 事 長　高岡正彦
副理事長　東　克明　守谷裕之　内藤健三
常務理事　石関明稔　野澤和雄　吉田兼紀　小林公彦
理　　事　浅野純次　大熊光治　坂本和穂
監　　事　宇津木正晴　玉熊英一

これからも宜しくお願いいたします。

総会終了後、「日本の公園の父　本多静六とWell-being」と題して、本多静六博士を顕彰する会会長渋谷克美氏による記念講演会を開催しました。本多静六博士が手掛けた公園の数々、特に理想的な公園の集大成である大宮公園について理解を深めることが出来、成功裡のうちに終了することができました。

（講演録は別途記載）

2023年度　長瀞宝登山下刈り活動報告

4月16日(日)　晴れ　メンバー　6名参加

今回はツツジ類を植栽した箇所を中心に下草刈りを実施しました。当初植えたツツジ類は比較的大きくなっています。また、補植したツツジ類も順調に育っており、10年後が楽しみです。

5月14日(日)　晴れ　メンバー　5名参加

東側斜面のサクラの植林箇所に近い広葉樹林帯を中心に下草刈りを実施しました。また、密になった木々の択伐やツル伐りも実施しました。

6月18日(日)　晴れ　メンバー　7名参加

東側急斜面の広葉樹の植林箇所の草刈り及びツル伐り、枝切りを実施しました。また、密になった木々の択伐も実施しました。

7月23日(日)　晴れ　メンバー　6名参加

今年は梅雨明けが遅く、今日は蒸し暑い中での作業となりました。雑草の生え方が違います。６月に下草刈りを実施した広葉樹のまだ手が入っていなかった西側箇所の作業を行いました。水分補強をしつつ、２時間作業を行いましたが、皆さん汗だくになっていました。おかげさまで広葉樹林帯の整備が大分進みました。

8月20(日)　晴れ　メンバー　21名参加

コロナの影響で三井住友海上火災のボランティアの方々は参加を見合わせていましたが、４年ぶりに８名の方が参加下さいました。

その他、初代会長の内藤保険サービス(株)から４名の参加を含めて総勢21名で下草刈りを実施することができました。

今回は２班に分かれて、さくら類の箇所と最下部の急な広葉樹の箇所の下草刈りを実施することができました。大勢の参加をいただき、感謝、感謝です。

おかげさまで今年度は延べ44名の方に参加いただき、植樹したサクラ類、ツツジ類、クリやカエデなどの広葉樹林のほぼ全域の下草刈りを実施することができました。

さくら類は大きく、ツツジ類も花付きが良くなり、そしてクリやカエデなどの広葉樹林も順調に育っています。

尻ナシ尾根のミズナラ

■新会員（会員番号 氏名 住所）2023.4～

975　伊藤 めぐみ　さいたま市

和名倉百年の森　第46号 2023年10月１日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会　高岡正彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-１コムナーレ９階

さいたま市市民活動サポートセンター内　メールボックスA-71

TEL/FAX：0480-22-3131

http：//www.100nen-forest.org　　e-mail：info@100nen-forest.org